

季節労働者調査記録 其の弐

川村 雅則

○作業は難航、、、

前号の続きで、道からの委託で実施している季節労働者調査のその後について報告する。

この調査は、(1) 季節労働者と (2) 彼らを雇用している事業者が対象であり、(a) 大規模なアンケートと (b) それぞれ100件程度のヒアリングが調査方法として採用されている。つまり4種類の調査を行なうことになる。

内容は省くが、思いも寄らぬ事態から予定していたとおりには作業は進まず、この原稿を執筆している12月段階での作業進捗状況は次のとおりである。すなわち、順序が逆になるが(2) 事業者調査の (a) アンケートは発送作業を終え、現在回収中、(b) ヒアリング100件は2011年1月に持ち越し!。(1) 季節労働者調査の (a) アンケートはほぼ終了(回収1900部程度) と思いきや、2万人規模が追加!。ただ、そんな中で、(b) ヒアリング100件 (人) はなんとか終了のめどがついたところである。この労働者ヒアリング調査を実施する中で感じたことを少し書き留めておきたい。

○一人でも多くの声を届けるために

前号でも伝えたとおり、今回の調査研究事業は、新規で雇い入れた調査員のほか、各地の北海道センターの理事メンバーなどで遂行している。センターの人間はみな等しくマンパワーであるという方針(?) にのっとり、理事長という肩書きを与えられている私自身も、言うまでもなく、全道をかけまわっている。

ちなみにヒアリングは、正確な記録が必要なので、ICレコーダーを使ってそのやり取りを記録している。そこまで時間をかけてイッタイどんな報告書を作成するのだと発注者である道側に尋ねられたことがあったが、「連合総研」に

よるワーキングプア調査報告書¹をイメージしている。ベタな言い方をすれば、このヒアリングで一人でも多くの季節労働者の「声」を行政に届けたいのだ。

○アポをとっても予定どおりにはいかぬ

調査がそううまくいかないものであることは周知の通りだが、季節労働者の場合、当所予定していた調査が突如キャンセルになるケースも少なくない。仕事が安定しておらず、仕事次第で会社に急に呼び出されるためだ。これはもう仕方がないとしかいいようがない。飛行機で地方を訪問しながら予定の半分の数しかヒアリングがこなせないこともあった。

あるいは、こんなケースもあった。雨風の中、やっとのこと労働者宅を探し当てたものの、仕事中のケガでつい前日に急遽入院してしまったなどのケースだ。がっかりしながらも、帰り道で頭をよぎったのは、労災は当然おきるだろうけれども、2ヶ月もの入院という大怪我で来年の春には果たして雇用されるのか? 所得保障は? など季節労働者の仕事や収入の不安定さである。一体どうするのだろうか?

○貧困という問題をあらためてリアルに感じる

さて、そんな悪戦苦闘の中で私自身が聞き取ったケースはいま数えてみたらおよそ60人に及ぶ。話を聞きながら同時に書き取るので十分に書き尽くしていないものの、それでも調査で使っている大学ノートも5冊目である。乱雑な

表 男女別・失業期間別にみた完全失業者数

単位: 万人、%

	全体		男女別			
			男性	女性		
	336	100.0	203	100.0	133	100.0
3ヶ月未満	117	34.8	58	28.6	59	44.4
3ヶ月以上1年未満	119	35.4	71	35.0	48	36.1
1年以上	95	28.3	70	34.5	25	18.8

出所: 総務省「平成21年労働力調査」結果より作成。

記録を眺めていると、1人1人の聞き取りの状況が思い出される。

例えば、現在生活保護を受給中というAさんは、築何十年もの古びたアパートで、横たわる病身の妻の横で聞き取りに応じてくれた。住まいに足を運んで労働者（失業者）の生活丸ごとを見聞きすることの重要性をあらためて感じさせられたケースの一つだ。

また、老いた母親と二人で暮らすBさんは、障害で会話が困難な中で一生懸命回答してくれた。現在はアルバイト生活だが、障害で生活の自立が困難なため、母親が亡くなった後は現在の住まいを出なければならぬという。障害と職場の差別、障害と貧困という私にとって新たなテーマを与えられた。

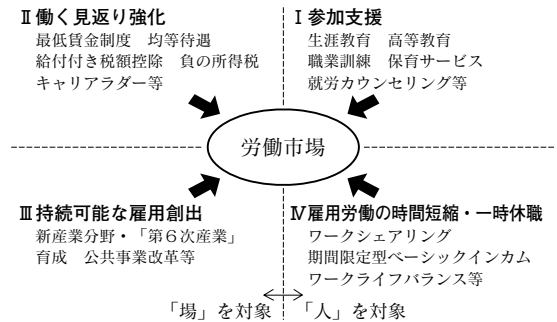
あるいは、春先からだったか、長期にわたって失業中というCさんは、仕事を探してもみつからない、でも家に居ても居心地が悪いからと夏場は朝早くから出かけてクルマの中で時間を過ごしていたという。長時間にわたる聞き取りの中で薄暗くなっても電気をつけずぼつりぼつりと話しをするそのそぶりから、指摘されて久しい長期に及ぶ失業（表）という問題が、失業者のメンタルに及ぼす影響を強く感じずにはいられなかった。失業保険がそろそろ切れそうなこの先、「いったいどうすればいいんでしょうね」という問いには何も答えられなかった。

○転職には手厚い所得保障と充実した教育訓練が必要

建設業の縮小をこれ以上やみくもに進めるべきではなく、むしろ、縮小ではなく例えば公共事業のあり方を変えることが必要であるという立場に立つならば、他産業への労働力の移動をしゃにむに進めようとするのは、問題であるときえいえるだろう。

そのことをふまえた上で、それでも、少なからぬ若い方からは転職を考えている、あるいは実際にいま仕事の合間をぬってハローワークで

図 雇用と社会保障の新しい連携 宮本（2009）p.144より。



仕事を探しているという話を聞く。

だが、その実現可能性を聞けば、まず一定の収入が保障された仕事が入らなかつたり、収入が一定程度保障されている仕事では逆に労働負担等が増す可能性があること（たとえば長距離トラックドライバー）、また、いままでのキャリアを捨ててしまうことのためらいなどが語られる。

あるいはDさんのような、専業主婦の妻と3人の幼い子どもを抱えているいま、このまま踏みとどまってズルズルと落ちていくのか、それともリスクも省みず転職の道を進むのか悩む姿をみると、転職には手厚い所得保障や充実した職業訓練が、加えていえば、転職先の労働条件の整備等が、必要であると、宮本太郎・北海道大学教授の『生活保障』の中の一枚の図が頭に浮かぶ。

ヒアリングの中でふと、なぜこんな（面倒といえば面倒な）調査に応じてくれたのか尋ねた時、周りにもなかなか話す機会のない自分たちのこの苦しさを知って欲しかったという趣旨のことを言われたことがあった。厳しい工期で予定をゆるさない中、その期待にこたえるべく、文字通り満身創痍ながらもみな全力で仕事にあたっている。

（文責：かわむら まさのり 建設政策研究所 北海道センター理事長）

1 「ワーキングプアに関する連合・連合総研共同調査研究報告書Ⅰ（ケースレポート編）困難な時代を生きる120人の仕事と生活の経歴」2010年6月。ホームページ上からダウンロード可。http://rengo-soken.or.jp/